

熊本市竜田陳内所在の 阿蘇二の宮神社境内で採取した石器について

池田 朋生

熊本県立装飾古墳館 主任学芸員

経緯

本資料は、平成8年の冬長谷部善一氏（県文化課主任学芸員）の情報提供が基で得られたものである。資料の存在については石の本遺跡群Ⅱ（1999）^(註1)、土層観察結果は石の本遺跡群Ⅲ（2001）^(註2)において報告している。

当時、池田は熊本市郊外にある石の本遺跡群において、発掘調査・整理報告を進めている最中であった。石の本遺跡群は、平成6年度の8区^(註3)の発掘調査を皮切りに、後期旧石器時代から縄文時代にかけての複合遺跡として調査が続けられていた。平成8年度は、発掘調査最終年度にあたり54区・55区と呼称した調査区において、やはり後期旧石器時代の遺跡調査が行われていた^(註4)。

この54区・55区では、上層は流土が厚く堆積していたものの、下層は、ほぼ後期旧石器時代の層と見られたV層（通称ニガシロ層）が良好に残っていた。さらに複数の分層が可能ならえ、各層位からは大量の石器と炭化物が出土するという、調査成果が示されつつあった。

のことから、V層の分層にあたりテフラ分析等、関連する科学分析を並行して行うことが計画された。計画にあたっては、先行調査である熊本県旧石器時代調査総合報告（江本1986）の調査成果を踏まえ、周辺の露頭・遺跡についても調査対象を広げた。ちょうど、小国町耳切遺跡で同様な後期旧石器時代の遺跡調査が行われており、江本の先行調査も阿蘇外輪山北側でも行われていたことから、熊本市石の本遺跡群の周辺から小国町耳切遺跡までの範囲を対象とした。さらに調査箇所の選定にあたっては過去に発掘調査が行われ、考古学上のデータとリンク

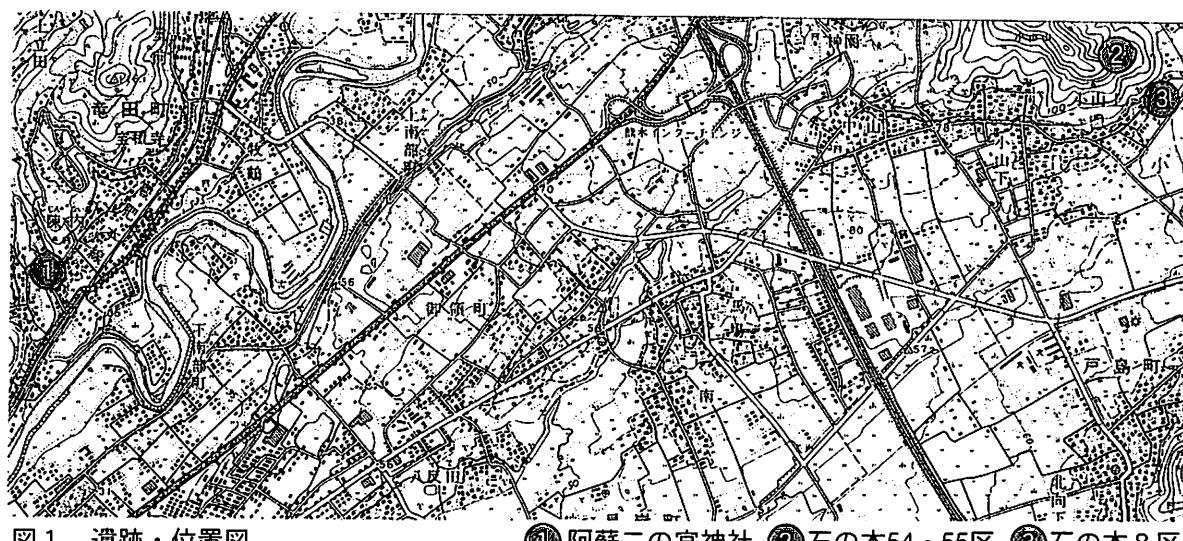


図1 遺跡・位置図

クする地点、及び先行調査による成果を追認できる露頭を対象に、古環境研究所の早田勉氏に調査を依頼した。長谷部からの情報提供は、ちょうどそのような計画がなされていた折のこととで、平成9年1月27日早速確認を行った。

石器採取地の立地と状況

石器が認められたのは、熊本市内の立田山の東麓にあたる熊本市龍田陳内3丁目6番、阿蘇二の宮神社の境内東側である。駐車場として利用するため境内の一画が地下げされ、露頭が容易に観察できた。現在も笹類が生い茂ってはいるが、土層確認は行える。長谷部が採取した石器とは、この露頭からの抜き取りによって得られたものである。

立地は、ほぼ南へ伸びる舌状台地の末端で、採取地のやや北側に比較的平坦な段丘面がある。この一帯が陣内上ノ園遺跡と見られ、周囲は宅地として利用されている。台地そのものは巨視的にみれば立田山の東側の丘陵に含まれる。国土地理院発行の二万五千分の一の地図によれば、石器採取地の標高は約50mである。

石器採取地は、この舌状台地の末端に南座する阿蘇二ノ宮神社の境内東側の断面で、約10m四方の参拝者用駐車場のため掘り下げられたところである。神社境内は社殿が作られた折に削平を受けていると見られる。平成13年に社殿が改築された折に、新たに削平を受けた北側でも土層確認ができた。こちらは目視で約5m上に暗色帶が認められる。石器採取地は何れも駐車場の整備で出来た東向きの土層断面からであり、採取した場所が纏まっている。

池田・長谷部・早田と共に現地にて土層の確認を行った。抜き取られた箇所を確認し、この出土層を中心に土層を観察した。このとき、更に石器1点を検出した。

土層観察

土層を肉眼で観察したところ、石の本遺跡群8区のものに最も類似すると考えられた。石の本遺跡群の基本層序との対比を進めると、採取地点の土層所見は以下のようになる。

I、II、III層：表土層、クロボク層、アカホヤ二次堆積層。本来堆積していると見られるこれらの土層は、笹類の繁茂によってここでは観察できなかった。

IV層：クロニガ層、暗褐色土。縄文時代早期の包含層。阿蘇周辺では良好な堆積が確認できるが、熊本市北部から植木町にかけて堆積が明瞭でなくなり、県北での確認は困難。

V層：ニガシロ層。いわゆるソフトローム、ハードローム、姶良Tn火山灰、黒色帶など幾重もの層を含む。層の細分は立地、堆積状況に大きく左右され、一遺跡内で変化に富むことも珍しくない。やはり県北ほど堆積が明瞭でなくなり、細分も困難となる。この層の細分とその根拠が、後期旧石器時代の詳細な時期を判断する手掛りになることは周知のところである。ここでは3つの層に細分できた。

V a 層：白斑状に粒土が混じる。堆積は薄く、ブロック状に入る。A T 包含層。

V b 層：相対的に、暗色の度合いが最も高い。

V c 層：下層のローム層との漸移層。やや黄色味を帯びるが、土質はニガシロ層そのもの。

VI 層：ローム層。この層の成因は、風堆積土（レス）と考えられている。

VI b 層より下層の拡がりは捉えられていない。上層だけで 2 つの層に細分した。

VI a 層：V 層との漸移層、やや暗色ながら土質は粘性を帯びローム層そのものである。

VI b 層：VI 層ローム層そのもの。観察の際採取した石器 1 点は、VI a 層～VI b 層にかけたあたりである。

VII 層：ローム層。後日、池田が境内北側で確認した土層である。VI 層にくらべ、やや赤味を増す。層の性格は良く判らない。付近では、国道 3 号線北バイパスの建設等によって切り通しした道路の壁面を、肉眼で観察を行った際の早田の指摘は、阿蘇 4 の非溶結性の噴出物ではないかとの指摘を得た。色調、土質から同じ土層の可能性を考えているが、はっきりしたことは判らない。

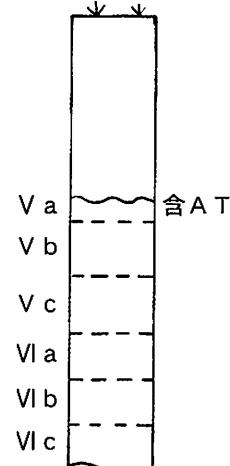


図 2
土層模式図

(石の本遺跡群Ⅲから引用・
加筆)

石器観察

採取した石器 5 点についての所見を述べておく。長谷部より提供された石器は 4 点(1～4)。土層観察の際得られた新たな石器は 1 点である(5)。何れの資料とも、採取後の僅かな欠損の他は、新たなキズ、耕作具による擦痕なども全く無く、縁辺も鋭く残りが良い。大まかに土を払い、水洗洗浄を行わなかったので、現在もローム層の黄褐色土が付着している。表採品とは明らかに異なる出土直後のような状態である。

1 二次加工剥片 縦長剥片を利用し、主要剥離面から表面左縁に二次加工を加えている。

右側縁にポジティブな剥離面を残しており、石核時の剥離痕と見られる。この右側縁の剥離面末端と礫面によってエッジが形成されており、そこに小剥離痕状の使用痕が集中している。エッジは使用痕によってやや丸みを帶びており、相当使い込まれていると思われる。主要剥離面に対し、刃部と想定できるこのエッジが 90 度傾くが、台形石器と呼称してもおかしくないものではないだろうか。表面に残る剥離痕から、石核時単接打面から連続して縦方向に剥離を行おうとした意図が見える。

2 使用痕剥片 表面に残る剥離痕を見ると、礫面から大ぶりな剥片を採取した後、打面を 90 度転位し、剥離面を打面に同一方向から最低 2 度の打撃によって縦長の剥片を採取して

いる。表面右側縁に鋭い剥片の縁辺が見られ、この縁片の中程から末端にかけて使用痕が認められる。なかでも小剥離痕状の使用痕が表面末端に数枚、裏面中央に1枚認められる。

3 使用痕剥片 両端が折れたような剥離のため、剥片のもとの形状がはっきりしないが、薄手の幅広な素材と思われる。表面上下両端にエッジが残っている。上端のものは残された縁片がごく短いものの、上下両端とも使用痕と見られる小剥離痕が表裏両面に見られる。上端の小剥離は側面の剥離面に切られているところから、折損前に既に使用されていたと見られる。折損後は、下端部の小剥離痕が剥離面を切っているところから、下端部の縁辺を積極的に使用していると見られる。

4 剥片 表面左側縁に折損と見られる剥離痕が見られる。主要剥離面側に、裏面を切る剥離痕が幾つか見られるが、意図はわからない。表面には多方向からの剥離痕が残されているところから、多面体の石核の一角から剥がされたものと見られる。

5 スクレイパー 幅広な剥片を素材にしている。二次加工と見られる下端部の剥離が施される前段階には、表面側、主要剥離面側とも幅広の剥離痕が見られる。このことから本資料は石核として使用されたものを転用した可能性がある。しかしながら、この資料は石質が明らかに他資料と異なり、風化が進んでいることもあって、細かな剥離の切り合い関係が不明瞭であり、観察結果には注意すべき点がある。

観察表

No.	器種	石材	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重さ(g)	備考
1	二次加工剥片	安山岩	サヌカイト質	6.9	2.9	1.9	29.2	長谷部氏提供
2	使用痕剥片	安山岩	サヌカイト質	7.2	2.6	2.0	31.3	長谷部氏提供
3	使用痕剥片	安山岩	硬質	4.7	4.6	1.0	19.2	長谷部氏提供
4	剥片	安山岩	やや多孔質	4.5	2.6	1.5	20.6	長谷部氏提供
5	スクレイパー	安山岩	軟質	3.1	6.5	1.2	20.1	土層観察時採取

所見

得られた石器は、長谷部から提供された資料がV c層下部からVI a層での採取と言うことである。土層確認時採取された石器はVI a層に近いVI b層の上部で見つかった。V層のなかでも、V a層は始良T n火山灰(以下ATと略す。)を含む土層であることがテフラ分析で判明しているので、少なくともAT下位出土の石器であることは間違いない。

以下、当採取地に近い石の本遺跡群AT下位の各遺跡との比較を試み、私見を述べる。

問題はVI層中という、層位の認識である。木崎の指摘にもあるように、暗色帶の下部出土からの石器である場合、3万年を遡る古い石器である可能性が出てくる^(註6)。曲野遺跡で特徴的な台形石器を含む一群が出土した層位は、V層からVI層へうつる漸移層ということである(江本他1984)。また、石の本遺跡群8区の石器群出土層位はVI b層が中心である。以上のような

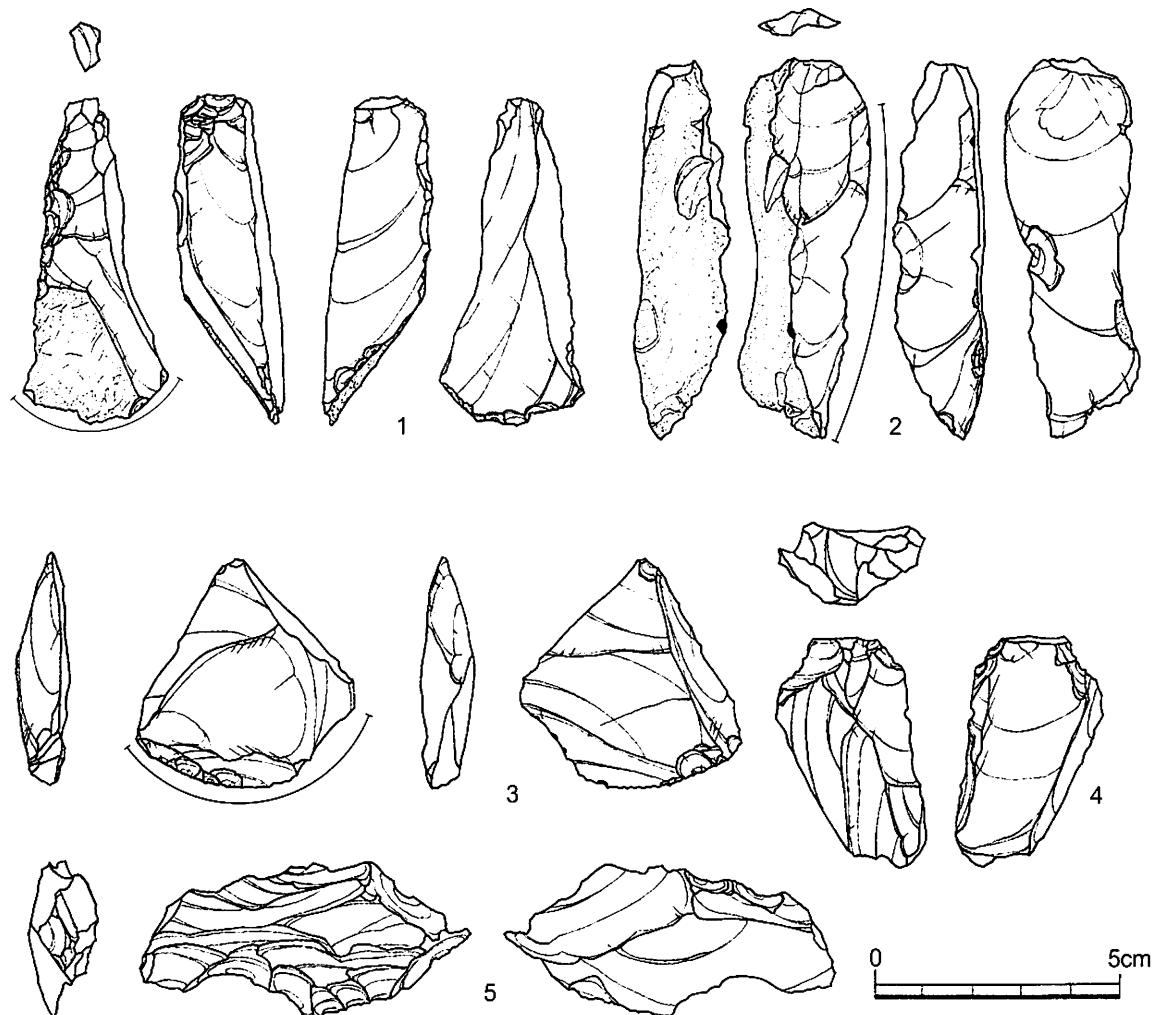


図3 採集資料実測図

調査成果から述べれば、本資料は漸移層からの出土であり、曲野遺跡と同様な層からの出土と見ることが出来る。しかし、暗色帯の堆積については、一地域はおろか地点によっても、地形の変化等に左右されることが多く変化に富んでいる。事実、石の本遺跡群の各調査区の土層観察では、極端な場合V層の細分がせいぜい2枚の分層しかできないものから、7枚もの分層が可能な土層堆積を示すところもある。何れの場合も、上層にATを含む層が検出されており、AT下位の土層堆積が異なることが判る。更に付け加えるならば、肉眼観察では3枚程度の分層が可能な堆積を示す層位の場合、最下層のVC層はVI層のローム層との漸移層と捉えられる。ところが、さらに堆積の良いところでは、もう一つ最下部に暗色帯と、上層の暗色帯との間層の2枚に細分できる。何れの場合でもローム層の直上の暗色帯を手掛りにすれば、層位的事実は覆らないわけだが、石の本遺跡群55区ではその二つの暗色帯^(註7)から異なる石器群がそれぞれ検出されており、今後の調査ではより厳密な土層観察が必要となるだろう。

また、曲野遺跡で検出された特徴的な台形石器を含む一群が、所謂漸移層のなかでもローム

質のVI a層から検出されるのか、ニガシロ層の範疇であるV層の下層から検出されるのかも、今後の調査において、出土層位把握の必須事項である。

今回の土層観察の結果、V c層～VI a層からの出土ということに従い、比較対象となる遺跡を上げるならば、石の本遺跡群54区AT下位のVI a層出土の石器群、さらに55区AT下位のV g層からVI a層にかけて出土した第1石器群と呼ばれる二つの一群がまず俎上に上がる。また、暗色帯の分層と漸移層の捉え方が前述のような理由で左右されることから、8区VI b層出土の石器群も検証対象として考慮してみる。

まず、54区AT下位VI a層出土の一群（以下、54区VI a層石器群とする。）は、チャートの石材を利用した石器群である。また、55区のV層最下層の暗色帯であったV g層からローム層であるVI a層にかけて出土した第1石器群と呼んだ一群は（以下、55区第1石器群とする）、西北九州産と思しき黒曜石、チャートを使用している。一方、8区出土の石器使用石材は、多孔質安山岩が主体をしめる。今回の採取品は全て安山岩である。8区に類似した石質には資料No.4、5が上げられる。1～3はサヌカイト質の緻密な安山岩であるが、8区の石器群にも僅かだが出土している。最も、彼の遺跡ではそれらの石質では接合資料が得られておらず、遠隔地からの搬入石器とみて間違いないだろう。一番類似する石材としては佐賀県北方町、多久市の鬼ノ鼻山周辺産の安山岩が考えられる^(註8)。

しかし、多孔質安山岩は54区でも出土している。但し、主要な使用石材ではなく、目立ったToolも検出されていない。

次に石器組成を見ると、54区VI a層石器群は刃部磨製石斧を伴う。更に特徴的な石器としてペン先形ナイフ形石器が検出されている。また、55区第1石器群は、西北九州産と見られる良質な黒曜石製の石器が認められ、石斧を伴わない。主要なToolはあまり見られず、ノッチドスクレイパーなどのスクレイパー類の他は、使用痕剥片が主体である。もっとも、54区AT下位の石器群にしてもToolには、ペン先形ナイフ形石器としたものは1例のみで、それ以外はスクレイパー、使用痕剥片がほとんどである。

また、8区に特徴的な折損^(註9)による剥離痕が認められる資料は3と5が上げられる。しかしながら折損資料自体は、何も当該期に限った特徴ではない。但し、8区の場合はその割合が高く、剥離技法と剥片取得の思考に明らかな差があり、注意が必要である。一方、1、2は縦長剥片の採取を意識するかのような一方向からの連続した剥離痕が見られる。そして2には、8区出土の石器には見られない、急角度の二次加工が主要剥離面側から連続して入っている。

このことから、本資料は採取された層位もふまえて考えるならば、8区石器群より後出のものと見られる。問題は、54区VI a層石器群、若しくは55区第1石器群のどちらかということになる。この両者の前後関係を導き出すのは層位的関係において他には、石斧とペン先形ナイフ形石器1点というところと、使用石材に遠隔地である西北九州産黒曜石が使用されている点で

ある。55区第1石器群は、時期判断の基準になる Tool が乏しく、積極的な評価は難しい。しかししながら、本採取資料が搬入石材であるサヌカイト質安山岩で Tool が作られている事実や、縦長剥片を意識した剥離が見受けられるところなどから、55区第1石器群に近い時期を想定したい。今後は、村崎の着眼点である曲野遺跡^(註10)、耳切遺跡との関係について、更に考察をすすめていく必要があるだろう。

(註1) 第5章、文中でのみ指摘。

(註2) 第4章、自然科学分析で土層断面、テフラ分析の結果を報告した。一点、本報告には訂正がある。当採取地点の立地を迫の上遺跡の同一台地末端と理解していたため、将来は迫の上遺跡の範囲内(熊本県遺跡地図上では範囲外)に収まるものと誤認していた。そのため、この報文では「迫の上遺跡土層断面」として紹介している。石の本遺跡群Ⅲにて報告されている迫の上遺跡土層断面のテフラ分析と石器出土地とは、実は当採取地のことである(県教育委員会によって発掘調査が行われた迫の上遺跡からは旧石器時代の石器は検出されていない)。実際には、一段下がった中位段丘上の遺跡により近接しているところで、迫の上遺跡はさらに上段の丘陵頂部一帯に広がる。中位段丘上の遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である陣内上ノ園遺跡である。地点を間違った呼称で報告したことをこの場を借りて訂正しておきたい。

(註3) 池田(1999)参照。本文では、便宜上調査時の「8区」と呼称するが、遺跡名は石の本No.8遺跡としたい。

(註4) 廣田(2001)参照。本文では、調査時の「54区」「55区」と呼称する。今後は、石の本No.54遺跡、同55遺跡と呼称したい。

(註5) 一連のテフラ分析の調査結果は、耳切遺跡、石の本遺跡群Ⅲ、同IVを併せて参照。

(註6) 木崎(2002)参照。

(註7) 江本(1986)で指摘された、BB2、BB3と考えられる。

(註8) 江本直氏が採集した、佐賀県北方町の安山岩等を参考にした。

(註9) 池田(1999)では、同じ石質の安山岩製の石器では、「折り取り」・「折断」という「技法」は確認できなかった。更に検討すべき課題ではあるが、ここでは、剥片剥離の際の「折れ」と考え「折損」と呼称する。

(註10) 村崎(2003)参照。

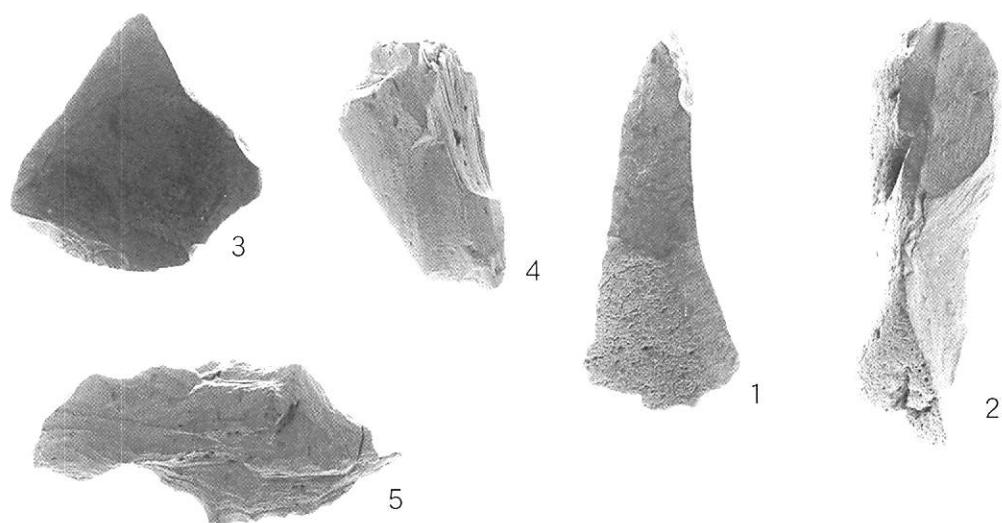
文中では、一部敬称を略させていただきました。また、本資料紹介にあたり、下記の方々にお世話になりました。

(順不同・敬称略)

長谷部善一、早田勉、江本直、古森政次、木崎康弘、村崎孝宏、岡本真也、師富国博、村田百合子

参考・引用文献

- 池田朋生 1999 石の本遺跡群Ⅱ 熊本県文化財調査報告第178集 熊本県教育委員会
- 池田朋生 2001 石の本遺跡群Ⅲ 熊本県文化財調査報告第194集 熊本県教育委員会
- 江本直他 1984 曲野遺跡Ⅱ 熊本県文化財調査報告第65集 熊本県教育委員会
- 江本直 1986 熊本県旧石器時代調査報告 熊本県文化財調査報告第81集 熊本県教育委員会
- 木崎康弘 2002 九州地方の後期旧石器時代に見る中期旧石器時代文化の残映「科学」72-6
- 廣田静学 2001 石の本遺跡群Ⅳ 熊本県文化財調査報告195集 熊本県教育委員会
- 村崎孝宏 1999 耳切遺跡 熊本県文化財調査報告第179集 熊本県教育委員会
- 村崎孝宏 2003 始良Tn火山灰降灰以前の石器群に関する基礎的研究 考古学論集Ⅳ 竜田考古学会



採集した石器 (S = 2 / 3)



石器採集場所